

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：38001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21989

研究課題名（和文）ハーレム・ルネサンス期の黒人作家の作品における即興文化と即興性への理念的関心

研究課題名（英文）Interests in the idea and culture of Improvisation in the Works of Black Writers during the Harlem Renaissance

研究代表者

萩埜 亮（Hagino, Ryo）

沖縄国際大学・総合文化学部・講師

研究者番号：60887925

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ハーレム・ルネサンス期の黒人作家・思想家であるClaude McKay、Zora Neale Hurston、Alain Lockeについて、文化と即興の観点から新たな知見を得ることができた。Lockeは即興性が黒人文化の正統性を担保すると主張しつつも、形式の支配下に置かれるべきだと考えていた。一方、Hurstonは黒人文化の即興性が西洋の美的伝統とは異なる美学によって成立していると強調した。McKayはディアスポラの状況下で黒人文化が商業主義と結びつき、即興的に生成されることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、批判的即興研究（Critical Studies of Improvisation）と呼ばれる学際的な研究分野によって、即興は芸術のみならず人間の創造的な営みや社会活動のあらゆる側面において重要な理念であり実践であると論じられてきた。本研究は批判的即興研究の成果を踏まえ、即興を黒人文化の伝統の枠内に留まる現象としてではなく、20世紀初頭のモダニズムの広がりやアメリカにおける文化多元主義をはじめとする社会文化的な議論に関係する概念として提示した上で、ハーレム・ルネサンス期の文学者が即興についてどのように論じたのか、それらが彼らの言説においてどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

研究成果の概要（英文）：In this study, new insights were gained from the perspectives of culture and improvisation regarding Claude McKay, Zora Neale Hurston, and Alain Locke, who were black writers and thinkers of the Harlem Renaissance period. While Locke argued that improvisation ensures the authenticity of black culture, he believed it should be placed under the dominance of form. On the other hand, Hurston emphasized that the improvisational nature of black culture arises from a different aesthetic tradition than Western artistic norms. McKay illustrated how black culture, in the context of the diaspora, becomes intertwined with commercialism and is generated improvisationally.

研究分野：米文学

キーワード：ハーレム・ルネサンス 批判的即興研究 Zora Neale Hurston Claude McKay Alain Locke 即興 黒人文学 モダニズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、20世紀初頭のアメリカにおけるモダニズムを中心とする芸術運動について、「即興」(improvisation)という観念がどのように理解され、美学的な問題や、芸術家たちの社会・文化的関心の発展においてどのような役割を果たしたのかを明らかにする試みである。具体的には、アメリカ・モダニズムの中でも、ハーレム・ルネサンスと呼ばれる黒人芸術家たちの活動を中心に分析をするが、それは次のような2点の問題意識を背景としている。

モダニズム期の美学において、即興は重要な概念であるにも関わらず、その点を集中的に論じた先行研究が少ないこと。即興文化についての研究は、これまでアメリカ文化研究や黒人文学研究の分野において、主として1940年代から50年代の文化や芸術を中心に論じられてきた傾向にある。しかしながら、ダダやシュルレアリスムにおけるオートマティスムや、カンディンスキーによる即興絵画、あるいはアメリカの白人作家であるWilliam Carlos WilliamsやGertrude Steinによる文学的即興、さらには認識に一種の即興性を見出したプラグマティズムの哲学者William Jamesなど、即興への関心や洞察はモダニズム期の芸術・思想に広く見出だせるものである。本研究は、アメリカ・モダニズム研究、アメリカ文化研究、黒人文化研究といった諸領域において看過されてきたモダニズム期のアメリカ文化における即興について、その美学的な意義や、社会・文化的な言説との関わりを明らかにすることを旨とする。

即興についてジャズや口承文化といった人種に固有の伝統を強調してきた従来の黒人文化研究の傾向を是正し、むしろ同時多発的かつ相互影響的に発生したモダニズムにおける即興文化の中にハーレム・ルネサンスの運動を位置づけ直すこと。モダニズム期の黒人文化の多くは即興性を重視するものであり、アメリカ黒人文学においても即興的音楽としてのジャズの影響などがつとに指摘されてきた。しかしながら、1920-30年代のハーレム・ルネサンスを中心とする時期のアメリカ黒人文学については、ジャズに直接的な関心を示したLangston Hughesについての研究を唯一の例外として、その詩学の発展や政治戦略において「即興」という観念が具体的にどのように関与していたのかについて、詳しく明らかにしたものは見受けられない。また、ジャズの即興性を「黒人文化」の特質として理解することに腐心してきたこれまでの研究は、ハーレム・ルネサンスの作家たちと同時期に、黒人以外のモダニストたちも即興への関心を示していたこと、ジャズを含む多くの即興的黒人文化が国際的かつ人種混交的なモダニズムの洗礼を経て発展してきたことを、過小評価せざるを得なかった。批判的即興研究によれば、即興はアイデンティティ・ポリティクスにおける戦略的モデルを示す文化的実践である。ハーレム・ルネサンスの作家たちが、20世紀初頭のアメリカにおける人種・民族・国民アイデンティティをめぐる熾烈な論争の渦中にあったことを鑑みれば、彼らの作品における「ジャズ」に限定されない広義の即興概念について検討することは、モダニズムにおけるハーレム・ルネサンスの位置づけおよび20世紀アメリカ黒人文学の発展について理解する上で極めて重要である。

## 2. 研究の目的

上記において提示されたテーマを追求するために、本研究はClaude McKay、Zora Neale Hurston、Alain Lockeを中心とするハーレム・ルネサンスの黒人作家における即興への関心が、同時代の抑圧的イデオロギーに抗おうとする彼らの詩学や社会文化的言説の展開とどのように結びついているのかを検討する。研究にあたっては、各作家による文学的实践としての即興ではなく、黒人文化や生活様式、あるいは言語やアイデンティティについての理念などの即興性に対する彼らの洞察を主たる対象として分析する。例えば、ハーレム・ルネサンス期には既に黒人文化としてのジャズとその即興性について様々な議論がなされたが、Locke、Hurston、McKayといった作家たちは、黒人霊歌やフォークロアといったジャズ以外の黒人文化や、ファッションや会話、移動といった日常生活、さらには権力による抑圧を回避する政治的抵抗の身振りといった多様な次元における黒人たちの即興に着目し、白人男性主義的な主流文化の言説や美学を相対化する独自の議論を展開している。近年、批判的即興研究(Critical Studies of Improvisation)と呼ばれる学際的な研究分野によって、即興は音楽のみならず芸術・文化的活動の全般、人間の創造的な営みや社会活動のあらゆる側面において重要な実践であり且つ理論的・美学的概念でもあるものとして論じられてきた。

本研究は批評的即興研究の成果を踏まえ、即興を黒人文化の伝統の枠内に留まる現象としてではなく、20世紀初頭のモダニズムの広がりやアメリカにおける文化多元主義(Cultural Pluralism)をはじめとするアイデンティティ・ポリティクスや文化の正統性に関する議論に関係する概念として提示した上で、ハーレム・ルネサンス期の文学者が即興についてどのように論じたのか、それらが彼らの言説においてどのような役割を果たしたのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

ハーレム・ルネサンスを中心とするモダニズム期の黒人作家は、音楽や口承文化、舞踏、ノマド的なライフスタイルからプラグマティズム哲学に至る様々な領域における即興性について、それぞれの視点から言及・考察している。これらについて、次の二点を軸として研究をすすめる。まず、これまでのジャズ・スタディーズや黒人文化研究における即興性についての議論を、最新の批評的即興研究の成果と接続することで、人種の本質主義に陥ることなく即興を論ずるための理論的枠組を構築することから始める。特に重要なのが、フランスのHenri LefebvreとMichel de Certeauによる社会学的分析、そしてアメリカのJohn Deweyらのプラグマティズムの哲学などに依拠した批判的即興研究の議論を参照して、「シグニファイン」(Signifyin(g))、「ミミクリー」(Mimicry)といった黒人文学批評における重要概念を再検討することである。また、Judith Butlerの「パフォーマティブ」(Performative)との比較を通じて、即興が「全体性」や「自律」への希求とその不可能性の認識とを止揚しようとする極めてモダニズム的な概念であることを明確にする。その上でハーレム・ルネサンスの黒人作家らについて、トランスナショナルな共同体(McKay)、民族誌による人種アイデンティティの構築(Hurston)、文化多元主義とその本質主義の超克(Locke)といった同時代のアメリカにおけるアイデンティティ・ポリティクスへの彼らの応答が、即興という現象への関心や理解によって深められた点を詳しく分析する。

### 4. 研究成果

本研究が対象とするClaude McKay、Zora Neale Hurston、Alain Lockeというハーレム・ルネサンス期の黒人作家・思想家について、文化と即興という観点から新たな知見を獲得することができた。

まず、LockeとHurstonについては、両者がともに黒人霊歌(ニグロ・スピリチュアル)をはじめとする黒人の民衆文化に着目しつつも、その文化的な価値を判断するにあたって「即興」概念をめぐる対象的な見方を示している点が明らかになった。Lockeは*The Negro and His Music*といった著作においてアフリカ系の文化における即興的要素を取り上げている。彼によれば、モダンジャズやモダンダンスの分野における即興性は、アフリカに起源を有する黒人がアメリカ近代社会に持ち込んだものであり、即興性こそが黒人文化の正統性を担保するものである。しかし、西欧中心主義的な進歩史観を共有していたLockeは、芸術において形式的な発展こそが進歩の証であり、黒人文化が真に優れたものとなるためには、即興的要素はあくまで形式の支配下におかれるべきであると考えた。すなわち、即興的な衝動や文化的特徴は、形式によってコントロールされつつ、しかしそこに「黒人性」を刻印するための必須の要素として理解されている。ここに、Lockeが少なからぬ影響を与えた同時代の思想家Horace Kallenの多元文化主義(Cultural Pluralism)との共通点が見出される。Kallenの多元文化主義においても、William JamesやJohn Deweyらプラグマティズムの思想家が提示した「未だ形成途上にあるもの」(still in the making)としてのアメリカ国家というイメージを通じて、即興性がアメリカ的アイデンティティの正統性を担保するものとして認識されている。しかし、KallenはLockeと同様に形式的統一を即興性よりも優位にあるものとみなし、オーケストラと調和(ハーモニー)という音楽的比喻によってそれを表現している。LockeとKallenの実生活上のみならず、その理論的構図における相同性は、同時代のモダニズム文化における思想上の論点が、即興と形式性との関係にあったことを示唆する。

Lockeが黒人文化は最終的には西欧的な伝統や形式へと同化すべきであると考えたのに対して、Hurstonは一見、無軌道で非形式的に見える黒人文化が、西欧の美的伝統とは異なる美学によって成立している点を強調した。特定のコミュニティに固有の暗黙知化されたルールや形式に依拠しながら即興的に音楽や民話、舞踏といった表現行為が集団的に行われる、という黒人文化についてのハーストンの叙述は、西欧的な「楽曲」(composition)が抑圧するものとしての即興(improvisation)の美学として、批判的即興研究の枠組みか

ら整理することができる。と同時に、Hurston は同時代のハーレム・ルネサンスの芸術家の多くが都市や都市的文化であり現代音楽としてのジャズに着目したのとは異なり、田舎の黒人コミュニティにおける伝統的音楽や民話にこそ、黒人文化の本質としての即興性があると考えた。変わらぬものを守り、継承してゆく伝統と、常に変化し、その場その時の状況に応じて表現する即興とは対極的なものであると一般には理解されるが、Hurston は伝統的な文化において、継承してきた価値(あるいはルール)を常に変わりゆく現実において適応してゆく即興性が求められることを強調する。Hurston の指摘は、Locke ら同時代の黒人思想家たちのみならず、T. S. Eliot のような白人モダニストや Theodor Adorno のような批評家らによる「形式/即興」の二項対立を脱構築する点で、極めて独創的なものである。しかしながら、Hurston は近代化が否応なく押し寄せる 20 世紀初頭のアメリカにおいて、即興を可能にする黒人コミュニティの伝統的なつながりや文化的遺産が、どのように変化するかという点についてはっきりとした立場を示すことができなかった。この点について興味深い視点を提供しているのが、ディアスポラの状況において様々な人や物が交錯する国際的な状況に着目した McKay である。McKay の小説は、経済ネットワークの両義性に着目しつつ、黒人文化というものがそれ自体、商業主義と結びついた文化と物資の拡散を利用しつつ、即興的に生成されるものであることを示している。文化こそが、強者が創り出すネットワークでありながら弱者による権力関係の転倒の場であるという視点そのものは、Paul Gilroy のような研究者によって既に論じられている。本研究では、Gilroy が「黒人の経験」として記述したこの視点を、Stephen Greenblatt、Tzvetan Todorov、そして Michel de Certeau を参照することで、近年の批判的即興研究におけるより一般的な議論へと接続した。すなわち、帝国主義のネットワークにおいて、支配者・被支配者は共に、他者の文化を奪取し、自己の利益のために援用しようとするゲームに巻き込まれており、そこにおいて優位に立つための条件が即興的な戦術である、という論点から、具体的な例として McKay の小説 *Banjo* を取り上げた。

本研究において、当初の目的である「ハーレム・ルネサンスの黒人作家における即興への関心が、同時代の抑圧的イデオロギーに抗おうとする彼らの詩学や社会文化的言説の展開とどのように結びついているのか」については詳細に明らかにすることができた。と同時に、本研究があえて相対化しようとしたジャズをめぐる言説についても、「ジャズ=即興」あるいは「ジャズ=黒人文化」という一般的な見解が、1920 年代～30 年代においては成立しておらず、むしろ即興性についての多様な見方を反映するかのようになり、それぞれの論者によってほとんど相矛盾する見解が示されていたことが明らかとなった。本研究の過程においては、例えばジャズの批判者として知られる Adorno について、単一的な価値を押し付ける文化産業に対して新たな価値の生産の可能性としての即興性を高く評価している点を指摘し、即興が黒人音楽についてだけでなく Adorno が理想とするようなモダニズム芸術において広く支持された概念である、という可能性を提示した。あるいは、自身の芸術表現にジャズを意識的に取り入れた Langston Hughes が 1927 年に発表した詩集のタイトルが *Fine Clothes to the Jew* であり、同年に公開された映画 *The Jazz Singer* がユダヤ系アメリカ人の家族と伝統をめぐる物語であったこと、Locke と対比的に論じた Kallen もまたユダヤ系であったことなどが示唆するように、本研究がその一端を明らかにした即興と文化的アイデンティティをめぐる問題は、20 年代モダニズムの文化圏においては、ユダヤ系をはじめとする様々なマイノリティの芸術家へと接続されるべきものである。この点については、今後の研究によってさらに明らかにしていきたいと思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 萩埜 亮
2. 発表標題 ハーレム・ルネサンスにおける「即興」への関心 アラン・ロックとゾラ・ニール・ハーストンを中心として
3. 学会等名 沖縄外国文学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 萩埜 亮
2. 発表標題 “Commerce! Of all words the most magical” – Banjo: A Story without a Plot における経済ネットワークと即興の戦術
3. 学会等名 多民族研究学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------